

DOCTOR'S MAGAZINE

ドクターズマガジン

ドクターのヒューマンドキュメント誌

No.105 August 2008

8

ドクターの肖像

金沢大学 心臓・総合外科 教授 /
東京医科大学 心臓外科 教授

渡邊 剛

Precursor —先駆者—

亀田メディカルセンターリウマチ膠原病内科医長

岸本 暢将

特集：対談

「医療におけるコミュニケーション」

写真：金子大輔（左）、山崎孝（右）撮影：山崎孝（左）、山崎孝（右）

「awake手術」ができるのは
世界で彼ともうひとりのみ

渡邊剛氏との会話に頻出したのは、「哲学」の2文字だった。取材が進行するうちに、表層のみならず、この人物が深層で重んじているのが、まさしく「哲学」なのだとわかってくる。「外科医」手技の人」なる一般的な捉えられ方がある中で、彼の外科医としての在りようは鮮烈だ。

「外科医は切って治すことに固執しがち。テクニクに走り、不適な態度をとる者も多い。ですが、それは大間違いです。医師とは、専門科がどうあれ、突き詰めれば自身の哲学を試される仕事。自分の持つ技術

心臓外科医が求めるべきは、
「技」ではなく、「哲学」。

だけで責を果たせるなどと思うのは、間違っても甚だしい。そんな者は、医師と呼ぶには値しません」

渡邊氏は、日本を代表する心臓外科医で金沢大学心臓・総合外科教授と東京医科大学心臓外科教授を兼任している。全身麻酔が危険なほど肺機能障害や脳血管障害を合併した患者に局所麻酔のみでバイパス術を施す、自発呼吸下心拍動下冠動脈バイパス術、通称「awake手術」を世界でできるのは、彼ともうひとりのみだ。

また、手術支援ロボットを用いる心臓手術の牽引者でもあり、外科医の手術手技を忠実に追従できる内視鏡下手術支援装置を使用し、完全内視鏡下にバイパス血管の採取と冠動脈への吻合を行う。彼が「ダビ

ンチ・パイロット」と呼ぶロボットによる手術は、皮膚に小さな鉗子注入用の穴を開けるだけですみ、従来の大きく切開する場合にくらべて侵襲が少なく、合併症の発生リスクも格段に低い。内視鏡手術用鉗子は自由に曲げられないが、ロボット手術用鉗子は手首の自由度があり、より精密な手術操作ができるため、冠動脈バイパス術だけでなく、弁膜症や先天性心疾患などのさまざまな心臓手術への応用の可能性も見えてきているという。

「外科医」の前に「天才」とつけるにふさわしい渡邊氏だが、医師を志望したきっかけを尋ねると、即座に漫画の「フラック・ジャック」との答えが返ってきた。まさに、めざしたような外科医になったわけだ。

取材：中村敬彦
文：及川佐知枝
撮影：田口昭充



ドクターの肖像：105

金沢大学 心臓・総合外科 教授／東京医科大学 心臓外科 教授

渡邊 剛

「高校時代に読んだ手塚治虫さんの『ブラック・ジャック』から強い影響を受けて外科医になる決意が固まりました。ブラック・ジャックは高額な報酬を要求するフリーの天才外科医ですが、あくまで偽善的なホイスであって、実は人情に厚いヒーティスト。一度かかわりを持った患者を決して見捨てない、一生主治医となる医師です。自分の腕が人間の生き死にを左右する——たいへん大きな責務に耐えつつ、困難な病気に立ち向かっていく彼の生き様、子どもながら外科医は人生を賭けるに足る仕事と確信できました」

自問自答を繰り返して 外科医になる覚悟を

高校時代に目標を定めた渡邊氏は、わき目も振らずに外科医、しかも心臓外科医をめざした。東京女子医科大学の榎原任氏が日本初の心臓手術を成功させた業績をつづった単行本を読んだ記憶が鮮明に残っていたと同時に、人の生死の象徴は彼にとって心臓だったようだ。

「受験勉強をしているころから、すでに外科医以外の進路は考えていませんでした。金沢大学医学部に入学して後は、心臓以外に興味がなく、解剖も心臓の解剖しか勉強せず、生化学でも心臓に関係する部分しか教科書を読まなかった。一方で、心臓外科については英語の論文まで読んでいて、かなり偏った知識のつけ方でした。まさか、僕が将来、教授になろうなどと同級生は夢にも思わなかったでしょう。地味で目立ちませんでしたから。けれど話を

してみれば、心臓には妙に詳しい奴だと気づいたはずですよ（笑）」

目標に向かって突き進む集中力は、驚異的だ。だからといって、もちろん今にいたれたのが、己の目的意識の強固さゆえとは思っていない。教えを受けた恩師たちを懐かしげに語る言葉は、心からの謝意と尊敬の念にあふれている。

「当時の金沢大学外科学教室の教授は、WPPW症候群（心臓の副伝導路に起因する不整脈をともなう疾患）の大師所、不整脈心臓外科治療の世界的権威である岩崎先生。入局当時、実験室で確認した成果を手術室で臨床に応用する、言わばBench to Surgeryを地で行くような、世界でも最先端の外科治療を行っていました。ただ、もともと精神的に影響を受けたの

は誰かと問われれば、1985年に派遣された大船共済病院（現横浜栄共済病院）で教えを請うた田中信行先生（故人）だと答えます。心臓外科部長だった先生からは、心臓外科医に必要な消化器や呼吸器の知識、患者さんと会話をする意味、インフォームドコンセントを学んだ。そして、小さい手術をやりつつ、心臓外科医が自分に向いているのか、やっていけるのか、自問自答を繰り返しながら覚悟を決める過程の必要性、哲学の必要性を説いていただいた。田中先生には、医師ならば心に2つの文化を持って教えられました」

人生の予定を変更し 臨んだ教授選

1989年から、ドイツの国費留学生としてハノーファー医科大学で学んだのも、「師と呼ぶに足る人物との邂逅あったればこそ」と渡邊氏は話す。

「岩先生が中心になって胸部外科学会を開催した折にハノーファー医科大学のHans-G. Bönig教授が来日されました。

僕は、学会開催期間中、彼の付き人になるよう言われ、講演をすべて聴いたのですが、いずれもすばらしかった。学会が終わるや、この方のもて学びたいと岩先生に申し出ました。

アメリカとドイツ。レベル的には変わらないのですが、僕は、やっぱりドイツに行きたかったですね。アメリカは嫌いなんです（笑）。戦後の日本史を考えると嫌悪感が先に立つ。アメリカ医療自体の秀でた点は認めますが、アメリカでものを学ぼうとは思いません」

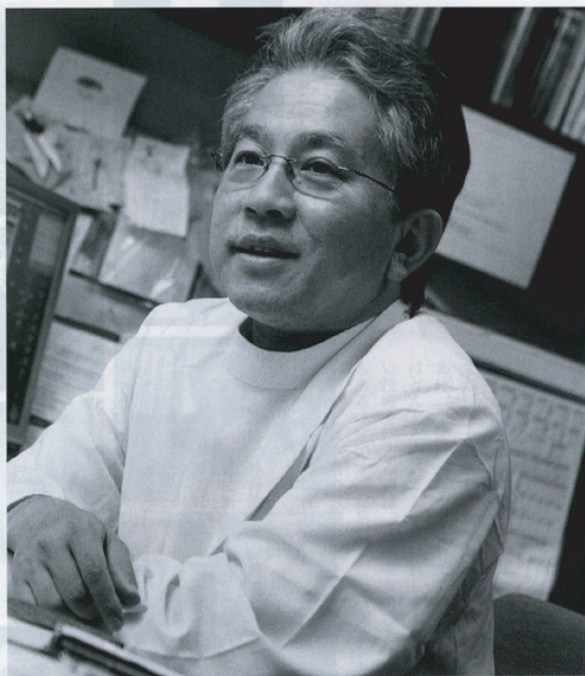
ハノーファー医科大学では、週に5回の執刀を担当した。日本では、30歳そここの医師が決して経験できる数ではない。心臓外科手術のベシッ的な部分を十分に修得し、最終的にはチーフレジデントとなり、なんと心臓移植を執刀する機会まで得たという。

しかし、2年半の留学期間を終え、日本で存分に腕を振るおうと医局に戻ってみると——待っていたのは海外帰りを疎む空気がだった。そして、すぐさま関連の富山医科大学への異動を命じられる。人生に意外な予定変更が迫られたのがこのとき。それまで頭をよきりもしなかった教授選が視野に入ってきたのだ。

「どうしても納得がいかなかった（笑）。7年後には絶対、教授選で戦い、勝って戻ろう」と心に誓いました」

ただ、富山に赴いてみると、術後管理も含め、すべて自分でやらざるをえないながらも、フリーハンドで手術をさせてもらえた。金沢にいれば、医局の秩序の中で下積み生活を強いられただけ。神様の思召しだったのだでしょう」と当時を振り返る。そこでは、さらに恩師とも恩人とも言える人との出会いもあった。

「赴任先の第一外科教授の山本恵一先生は金沢大学の先輩で、専門は心臓ではありませんでした。実にさまざまなこと——人生訓、大人としての作法など——を教えてくださいました。進歩的思考や深い洞察力は、僕の中にあつた哲学的な多くに理論づけをすることになりました。僕を、お子様から、大人（らしく）してくれたのが山本先生。今でも陰になり日向になり、僕を



応援してくれています」

結果的には、富山での有意義な日々により、教授選においてかなりバイハンドだった状況を覆すほどの実績が積み上がった。富山時代は、結婚や1998年のJCAHOの創設、1999年の完全内視鏡CABGの世界初の成功など、私にとって現在の基盤がつけられた大切な時代となりました」

眼光鋭く、身に起きた出来事を直截に述べる渡邊氏。失礼ながら大学教授などという体制のと真ん中にいる人とは、事前の説明なしでは思いもよらない。旧態依然とした医療界では受け入れられなかったはずのこのような人物が教授選に挑むことになったのは、本人の言葉を借りれば、日本の医療の状況を憂えた「神の思召し」だったのではないだろうか。

心の底から信じられる 手術室にいる神の存在

2000年、見事に教授選を勝ち抜いた。

2005年からは兼任で東京医科大学心臓外科教授も務めており、現在は、驚愕の多忙さの中に身を置く。水曜日の夜に金沢を発ち、木曜日は朝から東京医科大学で手術を行い、同日の夜には金沢へ戻るのが生活の基本サイクル。金沢と東京での手術は、週平均10例を超える。加えて合間には、他大学での指導や海外で開かれる心臓外科理解促進のためのシンポジウム、イベントへの出席予定が組まれている。だが、そんな中でも手術前日の準備には決して手を抜かない。指慣らし、練習、イメージトレーニングに周りに時間を割くのは、周辺スタッフの間では有名な話だ。

「患者さんへの敬意として当然でしょう。手術自体はせいぜい数時間ですが、その間は私が受け持ち医にも負けないほど患者さんを理解した医師でなくてはならない。だから、準備と練習に十分時間をかけるのは当たり前です」

特に週末を挟んだ月曜日の手術では、日曜日に布を縫うなどして、入念な準備を行う。一度休ませた手と指、そして現場で手術を組み立て、不測の事態に対処すべき脳を、本番に向けた臨戦態勢に復帰させるには特別に時間が必要なのだと言う。

「よく、1日忘れれば3日、3日忘れれば10日、技は後退する」と言われますが、そのとおりです。前日に準備していない手術は、手技も頭脳の対応も、明らかに準備したものに劣る。準備をせずに手術に臨むのは、患者さんに失礼。外科医としてあるまじき態度です」

渡邊氏は、何ゆえそれほど哲学を重んじるのか。理由の片鱗が垣間見られる言葉がつづく。

「ただ、いくら準備をしていても、これはもう自分では御しきれないと追い詰められた経験が何度もあります。そのたびになんとか難局を乗り越えたのは、普段の努力を神様が見てくださったからかもしれません。手術室には神様がいます。ある時期から、心の底からそう信じるようになりました」

人の生死にかかわると自身の生き方が問われる

これからの展望を問うと、手術治のスーパーヒーローに憧れつつ体現した人だけあって、生き生きと声を弾ませ「未来への夢が4つある」と申告してくれた。

「ひとつは、東京に年間1000例から2000例の手術のできる最高レベルの心臓専門病院をつくって、海外からも数多くの患者さんを迎え入れたい。日本には資源がないと言われますが、医療はある意味、日本が世界に誇るべき貴重な資源です。これだけ平均的レベルの高い医師が大勢ついているのですから、たとえば東京を医療特区とし、世界を相手にした医療展開も夢ではありません」

2つめは、ロボット手術の進展。僕が今もつと力を入れているテーマで、今年に入って日本ロボット外科学会（JROBO）を創立しました。将来はまったく切らず、穴を開けるだけで治療できるようになるでしょう。先日、心房中隔欠損症でロボット手術を受けた患者さんは、木曜日に手術をしたのですが、翌日の金曜日に見に行ったらベッドにいない。探してみても、レベーターホールで僕を待っていて、「い

やあ、先生、お世話になりました」と平気な顔をして立って言う。そして週末には退院されました。「ああ、この光景を若い医師たちに見せてやりたい」と痛感したんですね。もつと僕がロボット手術を引っ張りあげ、手がけられる人を育てないと、日本はどんどん遅れてしまう。新しく素晴らしい技術を伝えるのは、僕の使命のひとつでもあるはず。蛇足ですが、病院ランキングなどは本当の医療レベルを示していない。そんなものは注目されるべき指標ではありません」

3つめは、外科的なアンチエイジングの創始。古い血管に新しい血管をつなぐバイパス手術は、見方によっては最高のアンチエイジングだと思っています。そして、最後になりますが、四肢移植。この分野は、フランスでは顔面移植の症例も報告されていて、もはやSFではなく現実つつあります。日本の医療界にある技術を見渡すと、その課題と期待に応えられる者は、マイクロサージャリーができて、免疫の知識もある心臓外科医しかいません。手足がなくなった人に新しい手足をつける。それこそブラック・ジャックの世界です」

僕には、家族、教室のスタッフをはじめ、医師以外のすばらしい応援団がいる。彼らの助けを受けながら、僕は必ず夢を現実に行き着くところ自身が試される。人の生死にかかわるとは、自身の生き方が問われること。数え切れないほどの患者を死の淵から救う偉大な心臓外科医の人生を支えているのは、凛然とした医師の哲学、人間としての哲学であった。



生まれてすぐのころ



お父様と



2歳ごろ



お母様と



6歳ごろ



中学校2年生のころ



中学校3年生のころ友人たちと



28歳、大学院生のころ



ドイツ・ハノーファー医科大学で手術スタッフと



ハノーファー医科大学のHans G Borst教授



山本恵一氏の仲人で32歳で結婚